

佐藤健二 著

『文化資源学講義』

(東京大学出版会、二〇一八年八月、A5版、三〇八頁、四四四〇円＋税)

一

二〇〇〇年四月、東京大学大学院人文社会学系研究科に東京大学総合研究博物館を核に、文化資源学研究専攻が大学院の独立専攻として設置された。本書の著者佐藤健二は、この「文化資源学」という新分野に兼任として設立当初から深く関わってきた。「文化資源学」の名称を冠した標準的な教科書もないなか、手探りでその専攻を一八年間育て、二二年三月の退職を迎えた。これまでさまざまな媒体に書いてきた文化資源学にかかわる論考を一書にまとめたものが本書である。

著者は一九五七年群馬県生まれ、東京大学文学部卒業後、東京大学大学院社会学研究科に進学し、二〇〇五年より東京大学大学院人文社会学系研究科の教授になった。専攻は社会学・文化資源学である。彼は直接には二二年四月に逝去した見田宗介の直弟子にあたる。文化・社会意識および歴史社会学の幅広い分野で活躍したが、社会意識論・メ

張 銘 珊

ディア論・文化分析のデータ資料・素材の収集や分析が本書と密接に関わる。

主な著書としては、『読書空間の近代』（弘文堂、一九八七）、『流言蜚語』（有信堂高文社、一九九五）、『歴史社会学の作法』（岩波書店、二〇〇二）、『柳田国男の歴史社会学』（せりか書房、二〇一五）などがある。

本書では三部構成で、第一部は理論編で、文化・資源・情報三つの基本概念に関する議論を展開する。それを踏まえて、第二部では新聞錦絵・絵はがきのような具体的な文化資源の素材を対象に、さまざまな実践と方法を分析し模索する。多くの画像を含めた資料や図絵を多用し、社会学、民俗学、歴史学などの幅広い学問分野を横断して「文化資源」の視点からの実証研究である。第三部は、もともとは内閣府の災害を考える研究会での論考をもとにした関東大震災の流言蜚語にさまざまな資料を駆使して考察した特論である。

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに

第一部 基礎理論編

第一章 文化とはなにか

第二章 資源とはなにか

第三章 情報とはなにか

第二部 演習・実習編

第四章 新聞錦絵——メディアの存在形態を考える

第五章 戦争錦絵——想像されたできごととしての戦争

第六章 絵はがき——視覚メディアのなかの人類学

第七章 観光の誕生——絵はがきからの暗示

第八章 新聞文学——新聞と文学との出会い

第九章 万年筆を考える——筆記用具の離陸

第十章 フィールドワークとしての遠足——北村大沢楽隊

第十一章 実業——渋沢栄一と渋沢敬三

第三部 特別講義

第十二章 関東大震災における流言蜚語

二

「はじめに」では、著者自身『文化資源学講義』という聞き慣れない標題の本の内容を自らが簡潔に解題している。学問の名のりは排他性、専門性が色濃くでるが、著者はひとつの学問分野にこだわらない。著者の出自は社会学であるが、本書には人類学・文学・視覚文化

論・メディア論・民俗学・社会学思想史・歴史学等の領域が含まれている。

第一部は「文化とはなにか」と「資源とはなにか」、「情報とはなにか」の三つの章からなる。文化・資源・情報の概念の由来からはじめて基礎理論を構想する。第一章では、著者は「ことば」の中を覗きこむ直観として文化、「問うための足場づくり」、「意味の結び目をほどく」の三方面から文化とは何かを問い直している。そこで著者が主張するのは認識主体枠組の明確化である。文化という概念の歴史的・社会的拘束性、文化を生産・消費・流通過程としてとらえること、文化を「場」としてとらえること、生活する認識の総体化の四つを社会的な論点としてあげている（二六頁）。

まず、文化という用語は多義的であり、地域や自治体の「地域振興」も「文化振興」としてとらえられる。地域の文化を発見し、その性格や魅力を理解した上で、地域振興を取り組むことの重要性を指摘する。

第一の論点では、著者は生産する媒体としての資料を重視する。資料の収集と保存は重要だが、資料の内容分析と理解も重要とする。第三点において、著者は文化の「場」という概念を提示する。文化は単一ではない文化のなかで、多数の文化と抗争し、ねじれて排除した後で取り込む。このことを柳田国男が論じた「酒」を例に取り上げて考察する。「酒」というものの「場」を把握し、酒文化について論じずる。酒という文化現象は、さまざまな変化と結びついて、個人から集団までの社会問題、酒豪英雄の主張なども含まれる。

また、著者は、補助線という手法を使って、文化に関する五つの

「糸」の概念を詳しく説明している。本書でいう「糸」とは意味の糸がからみあった織物、複数の関係することばの意味をつなげながら成り立つイメージの意味の場である。第一の糸は、人間主体性である。第二の糸は、文化が有する宗教性でその排他主義を検討する。第三の糸は、実践としての耕作（自然への働きかけ）である。ここでは産業とメディア論からの実践を強調する。第四の糸は、都市の空間である。個人をめぐって説明する。第五の糸は教養で、一点の基礎の上で内実に対応する。

さらに、「文化の社会学」として文化が問題とされる三つの問題系を考察する。第一が帝国主義批判の問題系、第二が産業主義・資本主義批判とグローバルの問題系、第三が文化相対主義批判とエスノセントリズムの問題系である。

その三つ問題系については、評者は大衆文化とその認識に興味をもった。本書で鉄道や自動車をはじめとする移動手段の技術革新により、空間的・社会的な変容が指摘される。文明の進歩を伴って大衆の欲望が変化する。一九世紀の大衆文化はニセモノであり、真の人間の文化の存続が危機に瀕している。

第二章では「資源」を論じている。「意味の歴史的地層に分け入って」、「文化資源学研究専攻の出版」、「資源化することに変革力はやどるのか」三つの視座から概説する。著者は「文化」や「資源」の語が使用範囲のスプロール（無秩序な拡大）による混乱を抱えこんでいることを指摘する。両者は昔から使われていた語ではなく、二十世紀に入って応用や流用が始まったとする。国語辞典で「資源」は、地下の天然資源のみならず、労働力の人的資源から観光資源まで有用とされ

て範囲は広い。

歴史的角度から見れば、資源は戦争に基づいて普及流行する。戦前に資源は「総力戦」という新しい理念の枠組みによって、その用法の範囲を拡げてきた。具体的には、第一次産業の原材料やエネルギー等々という自然の「生産物」、第二次産業の制作物や「人的資源」が労働力から文化の領域まで拡大概念化された（六九頁）。

資源はまた調査とも関係が深い。また資源調査とは、戦争準備のため政府が各種資源の状態を調査することである。資源の発掘は、調査というフィールドワークとも不即不離の関係にある。著者は資源という語が、戦争を意識した国家による「上からの」総動員のなかで使われた危うさを指摘している。ただし、敗戦後も政府の諮問機関として資源調査会が重要な役割を果たしたように、戦後も連続していることにも注目したい。

「文化資源学」の中で、文化資料とは、言語、音声、画像、習俗、電子記録等々、様々な形態がある。それら有形無形の資料の特質を理解したうえで、調査、発見、整理、考証、評価、保存、公開の方法を探索し、人類のための資源として活用する新たな学問領域が文化資源学である。文化資源とは、人間が生み出してきた多様な文化の総体をよりよい社会実現のために有効に活用していこうとする新しい概念である。また文化資源は、現在注目されている文化財・世界遺産という概念よりはその範囲が広く、日常生活に潜んでいる資源の発掘も含まれる。第二章の最後で、著者は「資源化」をめぐって、特に「資源」と「資本」を説明する。その再生産と変革の可能性（八二頁）、時間意識の幅や厚みの違い（八三頁）、可能性として含みうる公共性（八

四頁)という三つ視座からの違いを分析する。また、歴史性や公共性という点を含めて考えている。

第三章は文体が敬体になっており、前二章とはかなり受ける印象が異なる。もとの出典が日本文学協会の『日本文学』に発表されたことに起因する。

この章では「情報時代の教育と文学」を扱う。まず、著者は、「情報」ということは軍事用語として、諜報活動と関係して使われることを前提して、昭和四〇(一九六〇)年代以降、電子計算機が普及していくなかで「情報」という語義も変化し、「情報化社会」「情報産業」「情報処理」など複合語が生まれる。著者は「情報」ということばには、意味の地層があり、それは三つに分解すると指摘する。

技術革新に伴い、文化研究の領域が影響を受け、古典・正統が大衆化する。具体的には、第二部の新聞錦絵、戦争錦絵、絵はがき、万年筆などの素材は、情報の媒体やそれを担う身体であり、近代に出現し大衆によって普及・流行していく。数多くの情報の中でどのような有用な情報を発掘・整理・保存するかに著者は注目にする。一方で、各素材は歴史的・社会的な視点を踏まえて提供された情報の内容を具体的に分析する。

第二部は「新聞錦絵」、「戦争錦絵」、「絵はがき」、「観光の誕生」、「新聞文学」、「万年筆を考える」、「フィールドワークとしての遠足」、「実業」の八つの章を分けて、情報を物質という側面から捉え直し、具代的な例を挙げて、ものとことばと実践を論じる。著者はその物物やできごとから、いかなる主題の文化分析が立ち上げられるかを問おうとしている。

第三部では、関東大震災における流言蜚語を対象として扱い、「特別講義」特論として位置づけている。

各地の警察に集約された資料を整理・再編成することで、現代社会の情報空間の全体の動きを分析理解していく。著者は「記憶の場」というカテゴリーが存在し、そのもとで、記念や追悼や顕彰そのものの中に潜むポリティクスが歴史学・政治学で盛んに論じられると指摘する。記念碑や建築物を建てることで、その記憶を忘れないという気持ち人間にはある。実に「記憶の場」は地理学でも評者は重要と考えている。

著者は流言の報告表や警察署管内における流言発生認識表、流言の防止および人心安定のための宣伝表などの原資料から三種類の表データ、流言を包含する情報空間全体の明確にする目的で、地域ごとの流言を時間軸に沿って動きがわかる表を作成し、流言の実態を概観している。この分析手法は大いに参考になった。地理学では、地震という災害を対象とする場合、主に自然現象や災害後の地域の空間的な変化について分析する。災害と流言を結ぶ、特に流言が主体として考える視点は、地理学にとっても大変興味深かった。

三

以下では、第二部の具体的な事例を中心に、評者として気づいた点を検討していきたい。

まず、第四章の「新聞錦絵」では、メディアの存在形態を考え、新聞の速報性、定期性と、「錦絵の時間・写真の時間」の三点から議論

している。新聞錦絵は鮮やかな主題図柄と豊かな色彩をもつので、伝統的な画題と区別し、「新聞」という文字中心に単色のことは「情報」世界から抜け出せる。明治七（一八四七）年七月に発行された「新聞大錦」を例として、鮮烈な紅つぶしの枠つけ、天使がささえる標題のような錦絵のデザインを分析し、新聞錦絵の流行の始まりを説明している。

新聞錦絵は当時の社会風貌と新しい印刷物メディアを反映する。一方、その時代の潜在的な文化も発掘できる。新聞錦絵という多色木版印刷文化は人に開化の世間の時事流行を伝達し、鮮烈な彩色を強調し、視覚的な翻訳と想像の基盤を提供する。著者は速報性と定期性が錦絵新聞の持っている報道的性格に由来するという。定期性は情報生産の制度として、速報性をささえる基礎となる。

新聞は近代の新しいメディアである。ただし新聞錦絵の制作者や享受者にとっては、速報性や事実か否かの判断よりも別の思惑が働く。人間は少しでも早くに知りたいと思うとともに、事件の正確さよりも、強烈さや奇妙さ、面白さ、興奮などの欲望がある。本書では、いくつかの新聞記事の事例から、錦絵の文化特性との断層から、錦絵が想像上での鮮明で劇的な現場のイメージを提供し、視覚的された物語を構成することを指摘する。

第五章では、戦争錦絵から想像される戦争を議論している。戦争錦絵は新聞錦絵と深い関係があり、新聞錦絵を受け継いで発展する。しかし、殺人や毒婦悪漢貞女孝子の美談醜聞を描く新聞錦絵とは峻別して、戦争錦絵は戦争のうわさを主題にした商品として生み出された。明治一〇（一八七七）年の西南戦争の時期に誕生し、日清戦争の時期

に確立する。一方で、戦争錦絵は新聞錦絵との共通点もある。想像力を入れて戦争の場面を再現する。戦争錦絵は大衆向けの商品のため、描かれた画面で自国の武勇や強さを展示し、相手国の卑小さを印象づける方向性をもつ。

また、戦争錦絵は視覚の上で写真よりもっと自由に描き出すことができる。写真は理性的な複製技術であり、現実の瞬間を反映する。一方、戦争錦絵は人の感性的な情感を含めて忘れない瞬間の場面を描画できる。錦絵の中で人の愁傷や憤慨が見えるのみならず、その製作者の心理やその時代の社会背景、大衆の心理なども反映している。

第六章では、絵はがきを素材として、視覚メディアの中で人類学を論じる。絵はがきは一八七〇年にドイツで誕生し、明治二〇年代ごろ、日本への渡来した裏面に写真・絵などの入った葉書である。本書は二種類の絵はがきを例に、異民族の発見を分析する。ひとつは『南洋館記念絵葉書』であり、もうひとつは『世界人種風俗大観』である。前者はボルネオのダヤク族とパプアニューギニア族の部族の風俗を写している。後者はアフリカやニューギニア、インドシナ半島などのさまざまな民族の風貌や生活、風俗を絵はがきにしている。

特に、『世界人種風俗大観』の絵はがきは日本で発行されたことが絵はがきの注記から明確になっている。著者は絵はがきは旅とも結びつくことを指摘する。人類学者の坪井正五郎の『絵葉書趣味』という本では、二〇世紀の絵葉書の特性と発展の背景を分析している。

さらに、絵葉書はメディアとしては、どのような問題を人類学的実践に提出するかも論じている。著者は次の三つ点から説明する。

第一に、旅行で絵はがきを書く経験は、人類学という学問の根源と

呼応する契機をもつ。第二に、絵はがきの経験は、郵便という近代的起源の世界大のシステムと結びついて初めて生み出された。第三に、絵はがきは写真の最初の流布形態であった（一四三―一四六頁）。絵はがきは錦絵と同じメディアとして使われるが、錦絵より真実の歴史を記録する性格を帯びる。そのメッセージや、絵はがきの生産―流通―消費の仕組みを分析することは重要だ。観光人類学でも絵はがきの分析が近年注目されている。

第七章は絵はがきの分析から「観光の誕生」を概観する。「観光」ということは、現在知られているような語義ではなかった。観光は国の威光という定義であり、後に風光見物の行楽気分を指すのは、日本の旅行者が増え、鉄道網が発展する歴史と深く関係がある。桑原武夫によると、大正時代は「観光」の代わりに「名所見物」ということばで、古跡神社仏閣をめぐることを指したという。観光の産業化とともに、観光は大衆向けてほかの資源を発掘できる。

著者はメディアとしての絵はがきの果たしてきた歴史的・社会的役割の一端を論じている。まず、絵はがきは「景観化」を促進し、人の観光意識と風景観に影響する。第二に、絵はがきは名所の観光地化・大衆化を推し進める役割を果たす。第三に、絵はがきは旅する主体の記憶の媒体として、観光客の気分を側面から反映している。絵はがきの中にも豊かな資源が孕まれている。

第九章では、近代筆記用具としての万年筆を民俗学を結びつけて考えている。まず、万年筆は一九世紀出頭のイギリスで発明された後に「書く」工具としては、アメリカによって基本形が完成された。日本にとっては、万年筆は西洋からの舶来品であり、丸善が明治一七（一

八八四）年に輸入販売する。最初、万年筆は広告で大衆に周知し、日清戦争以降に実用の時代に入った。戦争と旅行の需要と、万年筆の携帯の便利性を加え、万年筆が商品として普及する。しかし、その時の万年筆は値段が高価なので買う人が少ない。その間隙を縫って、国産万年筆が工業化とともに庶民生活に浸透する。また、万年筆は絵はがきと区別して私的領域で自分と交流して、個人・個性を強調する。

次に、万年筆は「書く」行為の中で内容を議論することもある、著者は新聞の広告における五つの気づいた点を分析している。第一に気づくのが、万年筆は自動車・飛行機のような新しい文明の代表と結びつけ利用されること。第二に、能率・効率・時間の節約の強調である。第三に、戸外での便利性・実用性。第四に、万年筆の日本の文字への適応である。第五に、いい贈り物として宣伝する（一七八―一八三頁）。

万年筆は民俗学にも大きな影響を及ぼしている。フィールドワークにおいて、宮本常一などの民俗学者たちは万年筆を愛用し、野外の現場で調査を記録する。民俗学を考えると、万年筆の受容に見られる豊かな地方性や、文化の多様性に注目する。万年筆の生態分析の必要性が歴史社会学と民俗学の課題であるとする。

第十章では、著者は宮城県石巻市の郊外に位置する村の運動会の見学旅行をきっかけに、運動会に登場する「北村大沢楽隊」と郷土教育について論じている。北村大沢楽隊はお年寄りのバンドにより「ジント」を演奏する。ジントとは、明治時代に西洋から入ってきた軍楽隊の音楽が、民間の楽団によって大衆化された吹奏楽隊である。次に、演奏場所や参加する人を説明し、地元の状況を知って郷土教育の展開

を説明する。著者は小学校の運動会は地方において特にそうだが、学校行事という以上に村の一種の祭りであると指摘する。また、斎藤莊次郎による郷土教育との関連を旭山小唄・旭山観光を例として分析する。

斎藤莊次郎が得意とする領域は、作詞や歌などの音楽教育というより、修身・国語・国史の教育の地方化である。郷土的色彩の濃厚な唱歌を歌わせることによって、郷土への深い愛着心を培い、郷土人としての自覚性を促す。旭山観光の開発においては、市場価値を追求だけでなく、「偉人」・「うた」・「観音堂」・「植樹」などによって郷土教育という精神的な側面の重要性を指摘する。

四

人文地理学を専攻する留学生である評者には、鉄道沿線において文化資源をどのように発掘するかという視座が興味深い。評者は「大正の広重」と呼ばれた絵師、吉田初三郎が描いた鳥瞰図の鉄道沿線案内に現在注目している。本書を通読することで、その内容の分析をより明確に理解することができた。また、近代の鉄道に関する新聞・絵はがきのような媒体にも関心をもった。各資料を使って、その内容を分析しながら、その特性や時代背景、製作者の心理を理解できる。これと地理学が得意とするフィールドワークの重要性をどう摺り合わせるかが今後の課題である。現地で問題を発見し、他の考え方を連想することもできる。

本書は「文化資源学」という専攻を理解する入門書というかたちは

とってはいるが、いわば著者が試行錯誤の上で行き着いたひとつ到達点でもある。そのため初学者にとって理解は容易ではないが、詳しい脚注によって理解が助けられた。文化・資源・情報三つの基礎理論に基づいて、後半では具体的な素材を扱って対象を分析するという実践との相互参照を通じて、この本の真価がわかる。本書はさまざまな学問分野における文化資源の発掘・保存にとっても、示唆に富む重要な資料と考える。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程)